



大連駅からハルビン駅まで運行していた特急列車である。叔父は物事を大げさに語る傾向があった。「万里の長城で、降ってくる電を片手で払いのけながら酒を飲んだ」ともいっていた。馬賊とも大立ち回りをしたそうである。なんにつけ大ぼろが得意の人であった。

あの時代「引き揚げ者」という言葉があった。「あの人は引き揚げ者だ」とどこか軽蔑を含んだ言葉であった。大陸から引き揚げて来た人も、日本しか知らない人をどこかで軽蔑していた節があった。満蒙開拓は国策であった。「ぼくも行くから君も行け、狭い日本にや

ら語っていた。どうも、男よりは女の方が野太いようである。過去を笑い話にする。男は、過去を引きずり生きて死ぬ。「同床異夢」という言葉もある。男と女が見る夢は、同じ寝床にいてもまったく違うらしい。

叔父は母の弟である。よく口お燗し、とっくりの酒を酌して母は大きな木の火鉢のやかんでお燗し、とっくりの酒を酌して

いずれかも」の句をくれた。名句だといまでも思う。山頭火も叔父ももういない。日本から個性派がいなくなった。個性派のことはいずれ書く日がある。

小学校で英語を教科に格上げするそつである。英語重視の改革が日本人の創造性を失わせてしまつ懸念があるとの意見がある。小学校での英語重視は、日本語能力の習得を犠牲にすることにはならないかという意見である。「まず日本語で考えるトレーニングをある程度のレベルまで受けて、それから英語で考えることを学ばないと、年齢に相応した深い思考ができる言語能力は、身につけにくい」というのである。人は言語で考える。

大ぼろ得意の叔父

住み飽きた」。こんな歌まであった。

叔父は普段はおとなしかった。酒が入ると大ぼろが始まるのである。引き揚げでは散々な目に遭ったはずだが、それは頑として語らなかつた。叔母は母に引き揚げの悲惨さを笑いなが

げんかをしていた。母は「兄弟は仲良く」とわたしに説教をしながら「わがたちはや」と口答えする。わたしは好きな星鹿の祖母は叔父を溺愛していた。家を出ていかざるを得なかつた次男坊への申し訳

た。酒が入ると大ぼろが始まるのである。引き揚げでは散々な目に遭ったはずだが、それは頑として語らなかつた。叔母は母に引き揚げの悲惨さを笑いなが

の好きな星鹿の祖母は叔父を溺愛していた。家を出ていかざるを得なかつた次男坊への申し訳

父は「葦燃ゆ 汽車の速さと